

病虫害発生予察情報予報第10号（1月の予報）

佐賀県

目次

1. 1月の病虫害	1
2. 気象概要	2
3. 予報の内容・根拠等について	2
4. 1月の予報	
野菜（イチゴ、ナス、キュウリ、トマト）	3
花き（キク）	10
5. 病虫害診断状況	11
6. 全国・佐賀県で多発生している病虫害及び新たに発生した病虫害	12
7. 農薬の適正使用について	13

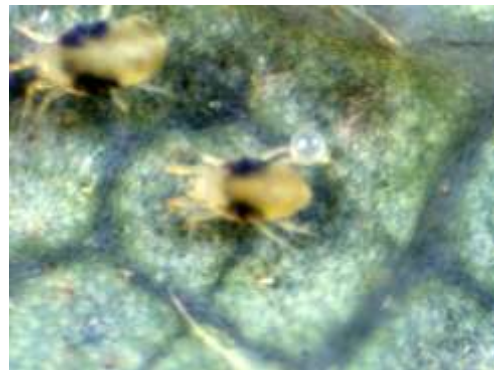
今月のトピックス

イチゴでハダニ類が多発生しています。これらによる被害を防ぐため、冬季の防除を徹底しましょう。

1. 1月の病虫害（予報で対象とした病虫害の中から抜粋）



イチゴのうどんこ病



イチゴのハダニ類



トマトの黄化葉巻病



キクの白さび病

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病虫害防除部
〒840-2205 佐賀市川副町南里1088
TEL (0952)45-8153 FAX (0952)45-5085

2. 気象概要

【3ヶ月予報 平成26年12月24日 福岡管区気象台発表】

1月 平年と同様に曇りや雨または雪の日が多いでしょう。

各病害虫の「予報の根拠」として、上記の向こう1か月の気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

下記の気象予報（確率予報）の内容について、本文中では便宜上、「気温並」、「降水量並」と簡略的に表現しています。

1月の要素別確率(%)

要素	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	30	30	40
降水量	30	30	40

【参考】

要素	平年値 (佐賀市)	平年差(比)の平年並の範囲 (九州北部地方)
1月の平均気温	5.4℃	-0.2℃ ~ +0.4℃
1月の降水量	56.7mm	74% ~ 103%

3. 予報の内容・根拠等について

病害虫の発生量（平年比）

○予報の発生量は平年（佐賀県の過去10年間）及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

○留意点として、平年値との比較であるため、平年値が低い病害虫は、「平年より多い」場合でも見かけの発生は多くないことがあります。一方、発生が毎年目立ち、平年値が高い病害虫は、「平年並」や「平年よりやや少ない」場合でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

予報の根拠

○予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

○それぞれの条件は、少発生（－）、やや少発生（－～±）、並発生（±）、やや多発生（±～＋）、多発生（＋）として示し、＋－を総合的に判断して発生量を予想しています。

写真

○1ページ目には、予報で対象とした病害虫の写真を抜粋して掲載しています。

○3ページ目以降には、巡回調査時の各作物の生育状況の写真を掲載しています。

4. 1月の予報

野菜

【概要】

作物名	病害虫名	発生量		病害虫防除の てびき記載頁	備考
		平年比	前年比		
イチゴ (本圃)	うどんこ病	やや多	やや多	188～191	平成26年10月29日付病害虫発生予察注意報第7号参照
	灰色かび病	やや多	やや多	191～193	
	ハダニ類	やや多	やや多	199～200	平成26年12月25日付け病害虫対策資料第18号参照
	アブラムシ類	並	並	204～205	
ナス	すすかび病	並	やや多	234～235	
	灰色かび病	並	並	232～234	
	菌核病	並	並	235	
	アザミウマ類	並	並	244～245	
	コナジラミ類	やや少	並	243	
	ハモグリバエ類	やや少	並	246	
キュウリ	べと病	並	並	166～168	
	うどんこ病	並	並	173～175	
	褐斑病	並	並	170～172	
	アザミウマ類	並	並	148～149、183～184	
	コナジラミ類	並	やや多	145～147、181～182	
トマト	灰色かび病	多	多	210～212	
	葉かび病	並	やや多	216～217	
	コナジラミ類	やや多	やや多	145～147、219～222	
	ハモグリバエ類	やや少	やや少	154～155、223	

【特記事項】

【イチゴ】

- イチゴうどんこ病の発生圃場では、発病果実等を除去し、硫黄粒剤のくん煙処理を併用するなどして防除を徹底する。薬剤防除の際は、葉裏や株の内部にも薬液がかかるよう、十分量を丁寧に散布する（[平成26年10月29日付病害虫発生予察注意報第7号参照](#)）。
- ハダニ類の発生がみられる場合には早急に防除を行う（平成26年12月25日付病害虫対策資料第18号参照）。特に、天敵を用いて防除を行う圃場では、防除を徹底し、ハダニ類の発生が認められない程度に密度を抑えてから天敵を導入する。
- アザミウマ類の発生が見られる圃場では、防除を徹底する。

【施設果菜類（ナス、キュウリ、トマト等）共通】

1. コナジラミ類やアザミウマ類は、多発生すると防除が困難であることから、発生初期から防除を徹底する。圃場においてこれらが媒介するトマト黄化葉巻病やキュウリ黄化えそ病・退緑黄化病等のウイルス病の発生がみられる場合には、伝染源となる発病株は早急に抜き取り、圃場外へ持ち出し適切に処分する。
2. 病害の発生を防止するため、こまめな換気や循環扇を活用するなどして、適切な湿度管理を行い、結露時間の短縮に努める。

【タマネギ】

1. 近年、べと病が多発生傾向にある。伝染源となる越年罹病株の早期発見に努め、認められたら抜き取りと早期防除を行う。

【アスパラガス】

1. 褐斑病等の次作への伝染源対策として、栽培終了後に刈り取った茎葉は必ず圃場外へ持ち出して処分する。さらに、土壌表面を焼くなどして病気や害虫の圃場内での越冬を防止する。

イチゴ（本圃）

（巡回調査：12月17日～19日）



巡回調査時の生育状況

1. うどんこ病

1) 予報の内容

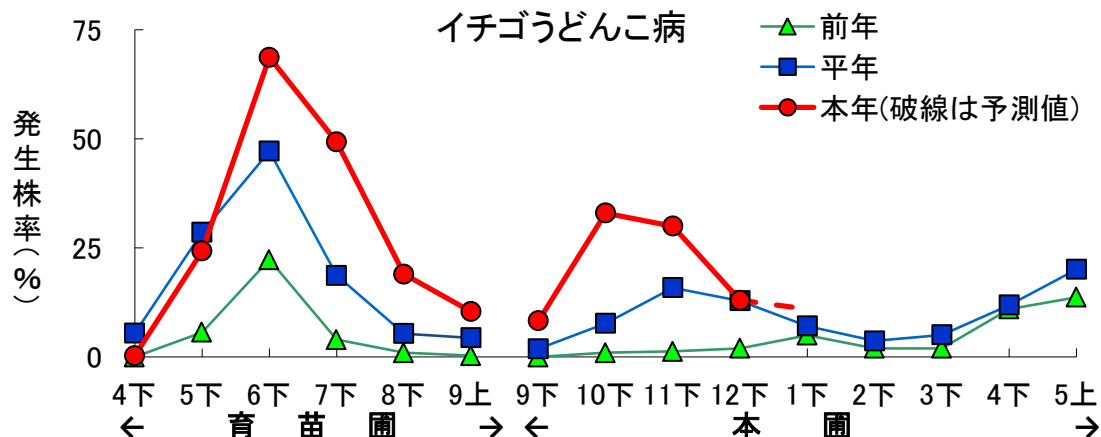
発生量：**平年よりやや多い**（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、発生株率は13.0%（平年12.9%、前年2.0%）であり、平年並で前年より多い。〈±〉
- (2) 今作では、育苗期から本圃初期に本病の発生が多く推移したため、圃場内での菌密度は高いと思われる。〈+〉
- (3) 病害虫防除員の調査(6圃場)では、5圃場で発生がみられ、発生株率は4.8%である。〈±〉
- (4) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 葉裏にも薬液が十分かかるように散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。
- (3) 詳細な防除対策は[平成26年10月29日付病害虫発生予察注意報第7号](#)を参照する。



2. 灰色かび病

1) 予報の内容

発生量：**平年よりやや多い**（前年よりやや多い）

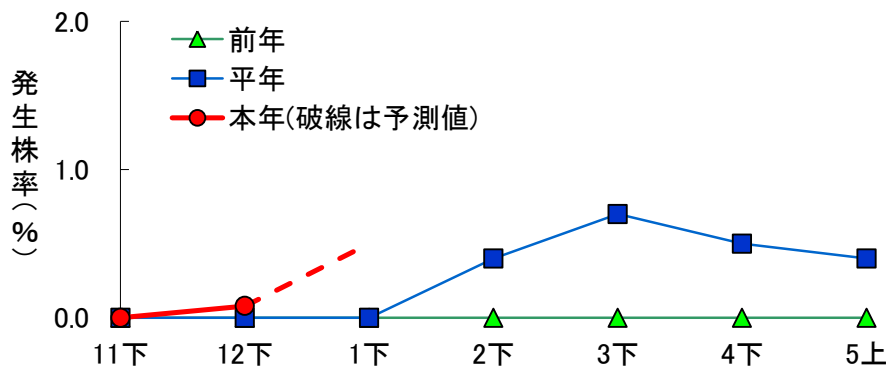
2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、発生初期が平年より早く、発生株率は0.08%（平年0.0%、前年0.0%）であり、平年および前年より多い。〈+〉
- (2) 病害虫防除員の調査（6圃場）では、発生を認めていない〈±〉
- (3) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) こまめな換気や循環扇を活用するなどして、施設内の温湿度を適切に管理し、結露時間の短縮に努める。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

イチゴ 灰色かび病



3. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：**平年よりやや多い**（前年よりやや多い）

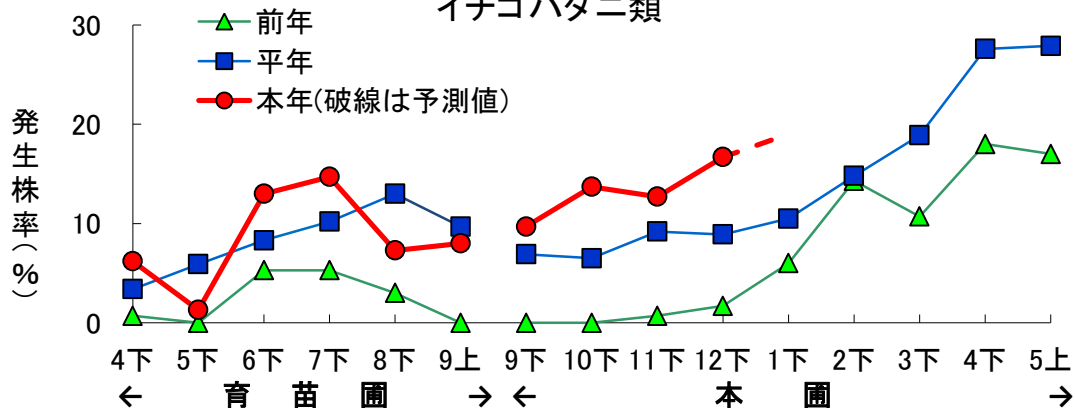
2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、寄生株率は16.7%（平年8.9%、前年1.7%）であり、平年よりやや多く前年より多い。〈±~+〉
- (2) 病害虫防除員の調査（6圃場）では、6圃場とも寄生が見られ、寄生株率は13.0%である。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本種は薬液のかかりにくい葉裏や下位葉に寄生していることが多いので、薬液が十分かかるよう散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。
- (3) 詳細な防除対策は平成26年12月25日付病害虫対策資料第18号を参照する。

イチゴハダニ類



ナス（促成）

（巡回調査：12月17～19日）



巡回調査時の生育状況

1. すすかび病

1) 予報の内容

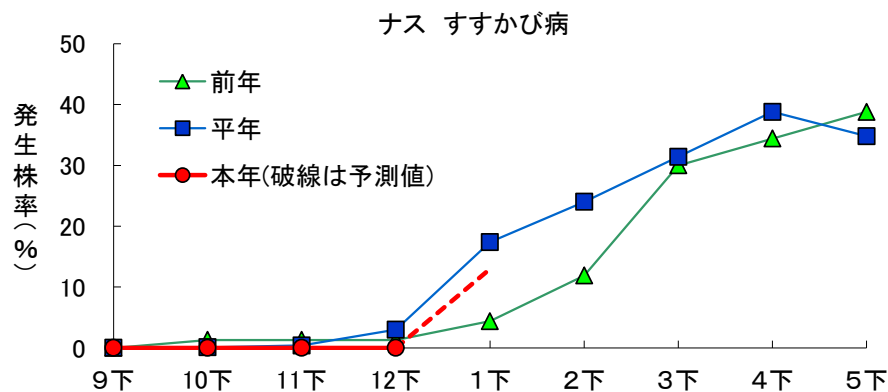
発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

- (1)巡回調査では、発生を認めていない（発生株率：平年3.0%、前年1.3%）。〈－～±〉
- (2)病害虫防除員の調査（2圃場）では、発生を認めていない。〈－～±〉
- (3)気象予報では並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1)発生初期からの防除を徹底する。
- (2)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



2. アザミウマ類

1) 予報の内容

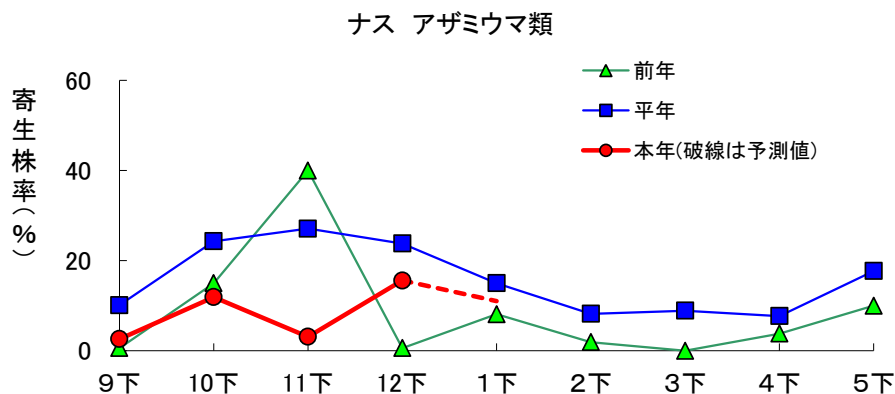
発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

- (1)巡回調査では、寄生株率は15.6%（平年23.8%、前年0.6%）であり、平年よりやや少なく前年よりやや多い。〈－～±〉
- (2)病害虫防除員の調査（2圃場）では、2圃場とも寄生が見られ、寄生株率は30.0%である。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1)葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるように丁寧に散布する。
- (2)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



3. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

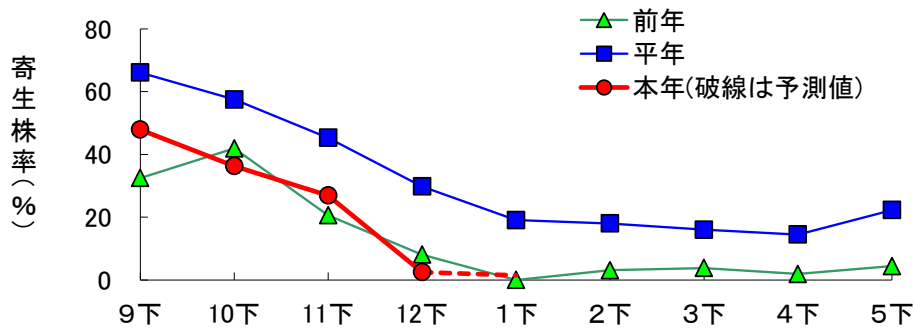
2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、寄生株率は2.5%（平年29.8%、前年8.1%）であり、平年より少なく前年並である。〈-〉
- (2) 病害虫防除員の調査（2圃場）では、1圃場で発生が見られ、寄生株率は5.0%である。〈-～±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 施設内の密度を下げるため、幼虫寄生葉は可能な限り除去して、施設外へ持ち出して適切に処分する。
- (2) 葉裏や下位葉にも薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。
- (3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

ナス コナジラミ類



キュウリ（半促成）

（巡回調査：12月18日～19日）



巡回調査時の生育状況

1. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

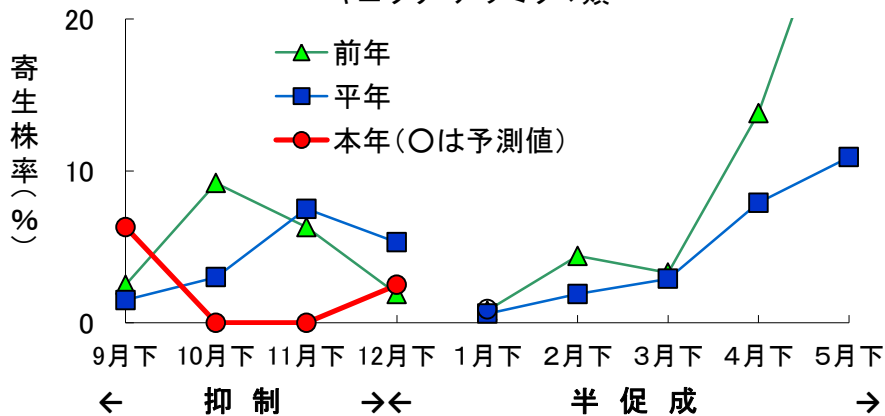
2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、寄生株率は2.5%（平年5.3%、前年1.9%）であり、平年よりやや少なく前年並である。〈-～±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) ミナミキイロアザミウマはキュウリ黄化えそ病を媒介するため、発生初期からの防除を徹底する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

キュウリ アザミウマ類



トマト

(巡回調査：12月17日～19日)



巡回調査時の生育状況

1. 灰色かび病

1) 予報の内容

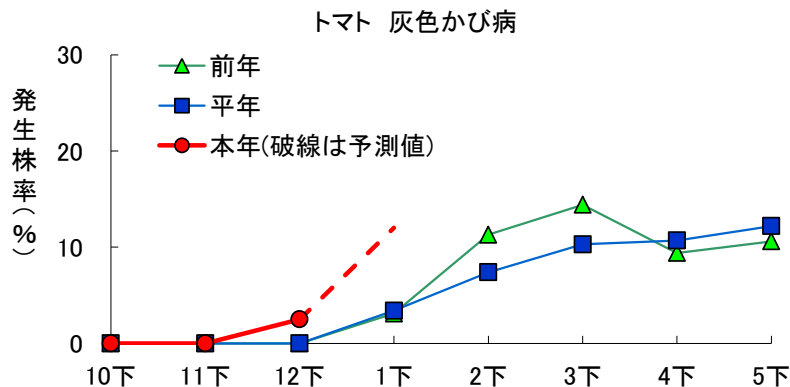
発生量：**平年より多い**（前年より多い）

2) 予報の根拠

- (1)巡回調査では、発生初期が平年より早く、発生株率は2.5%（平年0%、前年0%）であり、平年および前年より多い。〈+〉
- (2)病害虫防除員の調査（6圃場）では、発生を認めていない。〈±〉
- (3)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1)発病葉は除去し、発生初期からの防除を徹底する。
- (2)こまめな換気や循環扇を活用するなどして、施設内の温湿度を適切に管理し、結露時間の短縮に努める。
- (3)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



2. コナジラミ類

1) 予報の内容

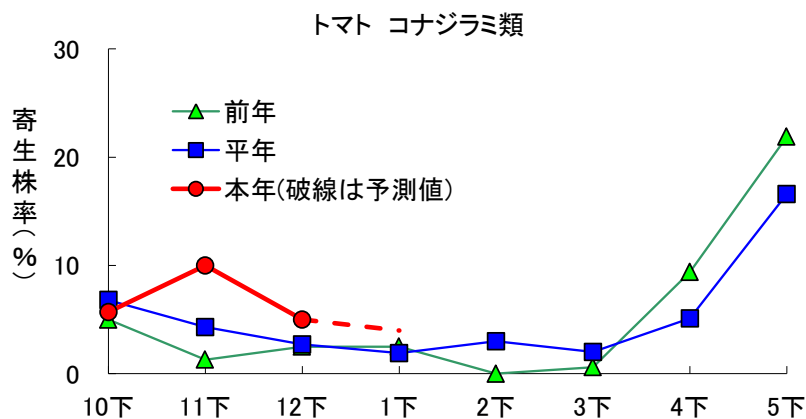
発生量：**平年よりやや多い**（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

- (1)巡回調査では、発生株率は5.0%（平年2.7%、前年2.5%）であり、平年及び前年よりやや多い。〈±~+〉
- (2)病害虫防除員の調査（6圃場）では、1圃場で寄生が見られ、寄生株率は1.7%である。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1)コナジラミ類はトマト黄化葉巻病を媒介するため、防除を徹底する。
- (2)幼虫の寄生が多い葉は除去処分し、葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるよう散布する。
- (3)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



3. ハモグリバエ類

1) 予報の内容

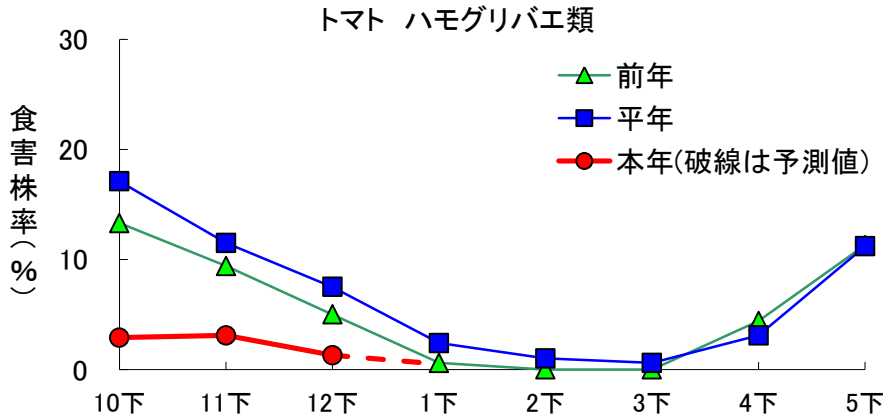
発生量：平年よりやや少ない（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、食害株率は1.3%（平年7.5%、前年5.0%）であり、平年よりやや少なく前年並である。〈-~±〉
- (2) 病害虫防除員の調査（6圃場）では、3圃場で食害が見られ、食害株率は5.0%である。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫寄生葉は除去し、施設外へ持ち出して処分する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



花き

【概要】

作物名	病害虫名	発生量		病害虫防除の てびきの記載頁	備考
		平年比	前年比		
キク (4~5月出荷 タイプ)	白さび病	やや多	多	343~344	
	アザミウマ類	並	並	348~350	
	アブラムシ類	並	並	346~347	
	ハダニ類	並	並	347~348	
	ハモグリバエ類	並	並	351	

【特記事項】

1. 白さび病は発病してからでは防除が難しいため、薬剤の定期的な散布による予防防除を行う。また、暖房機による送風や循環扇を活用するなどして、適切な湿度管理に努める。
2. アザミウマ類はキクえそ病、茎えそ病を媒介するため、低密度時からの防除を徹底する。また、これらのウイルス病が圃場内で発生している場合は、伝染源となるため、感染株は抜き取り、圃場外で適切に処分する。

キク

(巡回調査：12月17~19日)

1. 白さび病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、発生株率は17.3%（平年4.1%、前年0%）であり、平年及び前年より多い。〈+〉

(2)気象予報では並発生条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

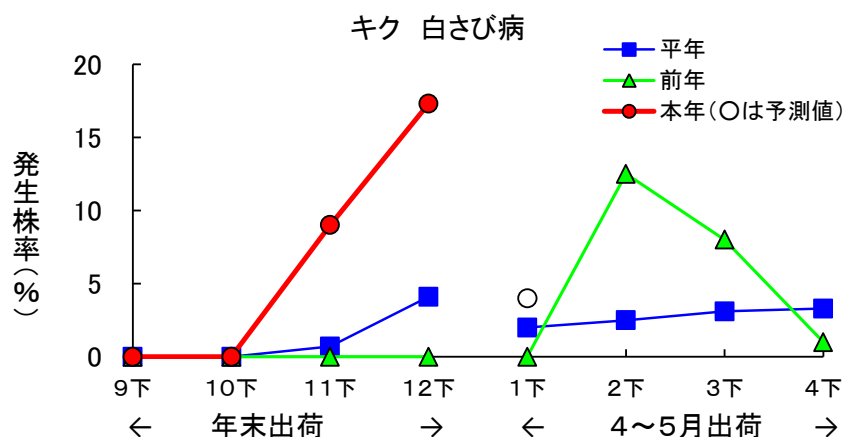
(1)発病してからでは防除が困難となるため、予防散布に努める。

(2)葉裏や下位葉にも薬剤が十分かかるように散布する。

(3)暖房機による送風や循環扇を活用するなどして、適切な湿度管理に努める。



巡回調査時の生育状況



5. 病害虫等診断依頼状況

平成26年11月21日～平成26年12月20日までに農業技術防除センター及び各試験研究機関に持ち込まれ、同期間中に診断が完了した病害虫の診断結果は次のとおりです。

	作物名	依頼件数	診断結果(件数)
普通作	大豆	1	種皮への雑菌の感染(1)
	計	1	
野菜	イチゴ	9	炭疽病(1)、疫病(3)、萎黄病(2)、ケナガコナダニ(2)、生理障害等(1)
	キャベツ	1	黒腐病(1)
	キュウリ	4	つる枯病(1)、灰色かび病(1)、緑斑モザイク病(1)、生理障害等(1)
	小ネギ	1	根腐病(1)
	ソラマメ	1	灰色かび病と菌核病の混発(1)
	タマネギ	8	細菌による鱗茎腐敗(1)、細菌とボトリチス葉枯症の混発(1)、ボトリチス葉枯症(1)、白絹病(1)、べと病(1)、生理障害等(3)
	トマト	4	軟腐病(1)、生理障害等(3)
	ナス	4	青枯病(1)、褐斑細菌病(1)、細菌による葉枯れ(1)、生理障害等(1)
	ハクサイ	2	えそモザイク病(1)、生理障害等(1)
	ハコベ	1	フザリウム属菌による苗立枯れ(1)
	ハツカダイコン	1	根腐病(1)
	ブロッコリー	1	生理障害等(1)
	レタス	1	生理障害等(1)
	計	38	
花き	カーネーション	1	生理障害等(1)
	キク	1	えそ病(1)
	サイネリア	1	生理障害等(1)
	ノースポール	1	生理障害等(1)
	デルフィニウム	1	立枯病(1)
	トルコギキョウ	3	生理障害等(3)
	計	8	

**合計： 20 作物
47 件**

内訳

糸状菌による病害	: 18件
細菌による病害	: 7件
ウイルス・ウイロイドによる病害	: 3件
害虫類	: 2件
線虫類	: 0件
生理障害等	: 18件
合計	48件(糸状菌と細菌の混発含む)

6. 全国・佐賀県で多発生している病害虫及び新たに発生した病害虫

主に11月25日～12月19日までに発表されたもの

警報・注意報（重要な病害虫の多発生が予想され、早めに防除する必要があるときに発表）				
発信元	内容	日付	作物	病害虫名
神奈川県	注意報	2014/11/28	イチゴ	うどんこ病
愛知県	注意報	2014/12/01	イチゴ	ハダニ類
熊本県	注意報	2014/12/03	イチゴ	ハダニ類
熊本県	注意報	2014/12/03	イチゴ	うどんこ病
長崎県	注意報	2014/12/16	イチゴ	灰色かび病
長崎県	注意報	2014/12/16	イチゴ	ハダニ類

注：太字は九州地方で発表されたものを示す

特殊報（新たな病害虫が発生した時などに発表される）			
発信元	日付	作物	内容
岩手県	2014/11/26	プラタナス	プラタナスグンバイ
愛媛県	2014/12/09	なし	サクセスキクイムシ

注：太字は九州地方で発表されたものを示す

技術情報等（九州地方で発表されたもののみ）			
発信元	日付	作物	内容
大分県	2014/12/01	白ネギ	平坦地域におけるべと病の防除対策について
宮崎県	2014/12/03	カンキツ	黒点病の防除対策について
宮崎県	2014/12/03	イチゴ	うどんこ病・ハダニ類の防除対策について
熊本県	2014/12/12	水稻	いもち病 QoI 耐性菌の発生状況について
宮崎県	2014/12/17	カンキツ	ハダニ類の防除対策について
福岡県	2014/12/18	イチゴ	うどんこ病の発生状況について

注：太字は佐賀県で発表されたものを示す

7. 農薬の適正使用を徹底しましょう！

農薬を使用する前に、ラベルの内容を確認しましょう！

- ①使用できる作物か？
- ②使用濃度は？
- ③使用時期は？（いつまで散布できるか）
- ④総使用回数は？（何回まで散布できるか）

みらんばよ！



④農薬が飛散して近くの別の作物にかからないよう注意しましょう！

散布した農薬が飛散して、その周辺で栽培されている農作物にかかることで、その農作物から登録のない農薬が検出されることがあります。

散布時に守りたいこと

◎無風、または風の弱い時に散布することとし、風向きには十分に注意しましょう。

➡ 風下から散布し、別の作物にかからないようにしましょう。

◎細かすぎる散布粒子のノズルは使わないようにし、また散布圧力を上げすぎないようにしましょう。

➡ 粒子が細かいほど、また、圧力を高めるほど飛散しやすくなります。

◎散布時の作物との距離や散布方向に気を付けて散布しましょう。

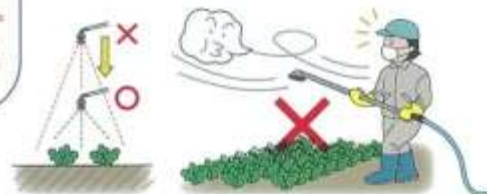
➡ できるだけ作物の近くから、作物だけにかかるように散布しましょう。

➡ 他の品目に向けた散布は止めましょう。

➡ ほ場の端部での散布は外側から内側に向けて行うようにしましょう。

◎適正な散布量で散布しましょう。

➡ 農薬の飛散量は散布量とほぼ比例して多くなるので、作物の大きさや病害虫の特性に合わせた適量を散布します。



こんな対策も有効

◎まわりの作物にも登録のある農薬を使用する。

◎飛散しにくい剤型（粒剤等）の農薬を使用する。

◎隣接する作物に影響を及ぼす恐れがある場合には、境界域に遮断物（ポリのシート、ネット、生垣等）を設置したり、他の作物との距離をとるようにします。

（佐賀県・佐賀県植物防疫協会作成パンフレットから抜粋）